

キーワードで読み解く 大学改革の針路

第2回

チューニング



一橋大学
森有礼高等教育
国際流動化センター 教授
松塚 ゆかり

米国コロンビア大学大学院博士課程修了後、同大学教育
経済学研究所研究員・講師、経済政策研究所（ワシントン
DC）研究員、一橋大学・大学教育研究開発センター
准教授、教授を経て現職。専門は教育経済学。研究テーマは、高等教育政策、教育の経済効果など。

オーケストラの各楽器が音合わせをするように、
異なる国の大学同士が連携し、お互いのカリキュラムを調整する「チューニング」。
教育プログラムの質を国際的に保証し、
留学による学生の流動性を高めるうえで、注目されている。

先駆者・欧州のねらいは 域内の教育力の強化

チューニングとは、大学間で教育課程や学習内容、それらにより養成されるコンピテンスや到達目標等を比較、確認し合い、互いの教育に関する共通理解を形成する工程である。Tuning（調律、調整、調和）という用語に表されるように、大学個々の特色を尊重しつつ、教育内容を理解し合える「共通言語」を形成し、カリキュラムの比較可能性を高めることを主旨とする。

「学生が何を学ぶのか」という視点で、教科や課程の内容および、目標が説明される。教科レベルにおけるこの作業は、その教科を担当する教員が専門分野を軸として行う。カリキュラム構成や学位レベルでのチューニングは、教科の組み合わせを包括的に捉える視座が必要であり、学科や学部、大学レベルでの作業となる。大学間のカリキュラムの等価性や連続性が確保

されると、学生の交流が円滑になる。同時に、チューニングの成果を公開することで、大学教育の説明責任を遂行し、教育の質保証にもつながる。

欧州のチューニングは、欧州連合が域内に高等教育圏を構築するというボローニャ計画に伴い、2000年から始まった。大学同士が学位の構造、並びに修学課程の年数や内容について情報を共有し、相互に教育の質を確認しつつ、域内の流動性を高めて欧州全体の教育・研究力の強化をめざしたのである。

こうした取り組みはその後世界に拡大し、日本においては2014年に一橋大学が「Tuning Japan」を設立した。急速に拡大する背景には、大学の国際化が進む中、留学における学習経験の実質性と意義を、学生に対して明確に示すニーズが高まったことがある。さらに国、あるいは地域別に認定されている質保証の基準と異なり、チューニングは地域を超えて自由に共有できると

いう要因もある。

教育とキャリアパスとの 関係性の検証も必要

チューニングの位置付けや工程は、地域により異なる。例えば、大学教育の質保証のしくみが確立していない中国では、その手段として活用され、質保証制度が整備されているアメリカでは、学位プロファイルの明確化、機関間（例えばコミュニティーカレッジと4年制大学との間）の編入や転学を円滑にする目的で行われている。日本では、教育評価基準や質保証のしくみは整っているが、進展する大学間の教育交流に対応できるカリキュラムや課程の国際通用性の確保は十分ではない。

一橋大学で、高度な国際通用性を確保する目的で実施した大学レベルでの工程を紹介する。

- ① シラバス等を活用して、各教科における学習内容の詳細や学習量、期待される学習成果を具体的に説明できる環境を整備する。
- ② IRで収集する履修行動等の教学データを活用して、学習成果が上がる教科の組み合わせや連続性を明確にし、学位プロファイルを説明する具体的情報を整える。
- ③ 同時に、大学での学習内容と卒業後の進路やキャリアパスとの連続・不連続性を明らかにする。
- ④ ③と並行して、卒業生を中心とする企業の代表と協議。社会のニーズを確

認、①と②のレリバンスを検討する。
⑤ 国内外の連携大学と上記の過程と成果を共有し、協働でカリキュラムやプログラムを開発あるいは調整する。
①～③が準備作業であり、⑤が、分野を軸とした大学間の連携作業となる。このような作業は、学生の留学先での科目選択を容易かつ有益にし、同質科目の重複履修を回避させる一方、共同プログラム運営においては、体系的カリキュラム運用を実現し、新規科目の効果的開発も可能にしている。

連携学位の実質性の 向上に貢献

チューニングにより、専門科目を中心とした正課科目の中身と単位、学位の国際通用性が向上する。参加大学間の留学では体系的な学びが実現し、ダブルディグリー等の連携学位も学術的に実質性を帯びる。チューニングの成果が周知されると、学生は留学先で何を学び、どのようなスキルが身に付き、その経験が将来的にどう役立つのかを

知ることができる。従って、留学の決断や行き先の選択が容易になり、留学を促進する効果が期待できる。

チューニングは、学習の内容や量を可視化するために単位の定義が明確になり、機関や国を超えた修得単位の積み上げを可能にする。このことは学生の留学ばかりでなく、社会人の復学を促し、意義あるものとする。学ぶ側の視点で大学教育の内容と成果を説明するチューニングは、グローバル化時代の人材育成に貢献すると言えよう。

実践例

ウェブシラバス

学生の自律的学習を促すために 学生の視点で授業内容と学習成果を明示する

チューニングの実践には 全学での環境整備が必要

チューニングは各専門分野の教員により行われるが、大学全体での環境整備がその実践を支える。その一例が、ウェブシラバスの活用である。現在、ほとんどの大学でウェブシラバスが整備されており、その充実が学生への情報提供を充実させることにつながる。同時に、教育と学習に関する実態を把握する重要な手段となる。

各教科の授業が積み重なって課程を形成し、各授業の成果の積み重ねが課程を通じた成果の主要な部分となる。このことから、個々の教科はチューニングの最小かつ最も重要な対象であり、ウェブシラバスに記載された情報を確

認・比較検討しながら、教科間、分野間、組織間のチューニングを実践することができる。さらに、チューニングの主旨でもある、学生の視点に立って、授業の内容（学生にとっては学習内容）や期待される学習成果を明示することにより、学生の積極的履修選択と自律的学習を促すことが可能となり、ウェブシラバスの充実が多層的效果を有する。

学生が理解しやすい 記述を促すために

ウェブシラバスでは、授業の目的と内容、計画、到達目標、評価方法および基準、授業外学習時間等は、具体的かつわかりやすく記述する。

【授業の目的】は、教員が学生に何を

期待しているのかわかるよう、授業の『ねらい』を記入する。【到達目標】では、授業を通じて学生が修得・理解し、活用できるよう期待される知識・技能・能力等の学習成果を記入する。これらによって、授業目的と到達目標との違いを明確にするとともに、養成される専門知識と一般的能力を分けて例示するなど、十分な参考情報を提供する。

さらに、【到達目標】での記述内容を、【成績評価方法】と【成績評価基準】に対応させ、当初、学生に修得してほしいと期待した知識や能力が学期終了時に備わったかどうかを適切に判断できる構成にする。これにより、学生は学習計画を立てやすくなり、自律的学習が促されるとともに、成績評価における信頼性を高めることにもつながる。

図表 チューニングにより期待される効果

